
0組の温泉旅行

マムー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

0組の温泉旅行

【コード】

N2004Z

【作者名】

マムー

【あらすじ】

0組の皆が温泉に行きます。

(前書き)

駄文なうえ、一部キャラ崩壊があります。ご注意ください。

「ねえ、ここの温泉で一泊しない？」

その騒動は、そんなケイトの一言から始まった。

与えられた作戦も無事遂行し、後は魔導院へと帰るだけとなった0組のメンバーは、朱雀領の山間部付近にある、とある温泉宿へと辿り着いた。

そこから魔導院まで、チョコボを使えば1時間程度。当初の予定では、その温泉宿は素通りで、真っ直ぐ帰るはずだった。しかし、時折現れる強力なモンスター『グラウンド・ホーン』と遭遇。慌ててこの宿に駆け込んだのだった。

「おお〜ケイト冴えてるね〜。シンクちゃんもさんせ〜」

素通りすると決めていた時は全く気にならなかったが、いざ入ってみるとやはり気になるのが人間の性らしく、堅物のクイーンや真面目なデューズも、その提案は即座に却下には出来なかった。

「た、確かにそれは魅力的な提案ですが……私達には作戦の結果を報告すると言っ義務もありますし」

それに対しジャックやシンクといったいわゆる『のんびり組』が反抗。普段ならばクイーンのフォローに周る他のメンバーも、どちらにつくか決めかねていた。

そして、言い争う事約五分。

「そ、そもそも！クラサメ隊長の許可が無ければ私たちは休暇は取れませんし、隊長に聞くのが先ではありませんか？それでもし、許可が出ればゆっくり楽しむ方がいいじゃないですか」

というデューズの言葉で、一旦魔導院と連絡取るのが先になった。

正直に言うところの時、ジャックやシンクさえも含めた全ての0組メンバーが「あ、温泉なくなっただな」と感じた。

相手はドがつく真面目人間。作戦結果報告もなしに自由を与えてくれるとは思えない。どうせあのマイナス20 くらいの凍てついた声で「バカな事を言っていないで早く戻って来い」と言われるに決まっている。

そう皆が思った。

「ふむ……………確かにこここのところ作戦続きだったからな……………」

……………今回諸君たちが当たった任務の成功は、諜報部から既に報告を受けている。明日中に帰還すれば、問題ないだろう。久々に羽を休めてこい」

「……………え？」

かくして、急ぎよ0組の温泉旅行が実施される事となった。

男湯・露天風呂

「いやあ、まさか隊長の許可が降りるとはねえ」

「全くだな。隊長の言葉を聞いた時は耳を疑ったよ」

宿を取った0組は、さっそく温泉へ入る事にした。湯船の中では、作戦中もお気楽なジャックは勿論の事、普段は無表情のキングやエースも、少し緩んだ表情をしていた。

「ま、自分で言うのも何だけど、俺達本当に作戦続きたったからな。クラサメ隊長だって、大目に見てくれたんだろ」

と、言いながらわしゃわしゃ髪を洗うのはマキナ。いつも襟を立てているマントがないと少し華奢に見えてしまう。

「オイお前ら!!こっち来いって一緒に修業すんぞコラア!!」

原泉を出している小さな滝のようなものに入り込み、手を合わせ修行のような事をしているナインは、至って通常運転だ。

「そんな下らないこと出来るかよ」

「ンだとコラ。下らなくねえよ立派な修業だぞ!!オラア!!」

「分かってませんねナイン。修業という言葉の意味は本来

」
「おいトレイ。今は休暇中なんだからお前のウンチクも休んでおけ」

「アツハハハア！！キング良い事言うねえ」

「そうだエース。知ってるか？今度牧場に新しい品種のチョコボが届くらしい」

「本当か？それは一度見てみたいな」

「オイエイトコラア。何離れてんだよ、いいから修業すんぞコラア！！」

「おい、引つ張るなバカやめッ

そうしてナインが騒ぎだし、エイトが巻き込まれ、トレイとキングが苦笑を浮かべて、ジャックとマキナは楽しそうに、それを見つめる。

その輪からは少し外れ、肩まで温泉に浸かり、岩に背を預けリラツクスし切ったエースが、感慨深げに呟いた。

「戦争が終わったら、またここに来たいな」

その言葉に一同は黙り込み、エースを見つめる。

その願いが叶うのは、いつ頃だろうか。まだ朱雀は、魔導院の近くの領地を取り戻したばかり。これからさらに戦線を広げていき、戦力も分散するとなれば、領地奪還も、今までのようにすんなりとはいかなくなるだろう。

0組はアレシアの力で蘇生する事ができても、他の候補生はそうはいかない。

目の前で大切な友を見殺しにすることも、あるのかもしれない。

「……………そうだな。また来よう」

「今度は、マザーも一緒行こうぜ。コリアー！」

「クラサメ隊長もな」

「ナギヤリイド。クオンと言った他の候補生達も来れますかね」

「来れるさ、皆。俺達が平和な未来を作れれば」

それでも、0組は前に進む。一つでも死という悲劇をなくし、一滴でも記憶の雫が掌から零れ落ちないように。ただひたすら、前へ。

「あー！じゃあ皆さあ。もっと平和的なことしようよあ」

と、そこで、何かを思い付いたらしいジャックが、いつも以上の笑顔で呼びかけた。

「なんだ？いきなり。部屋に戻ってトランプでもするか？」

エイトの言葉に、ジャックは顔の笑みを更に深くする。

「違う違う。……………アレ、覗くんだよあ」

そう言っ指差すのは、隣の女子露天風呂。意識を向けてみると、向こうも向こうではしゃいでいるのか、キャッキヤという声が聞こえる。

「……………」

先程とは全く違うなんとも言えない沈黙。いや、皆言いたい事は全く同じであるのだが、誰が言うのかを決めかねている沈黙が辺りを包む。

「……………」平和的どころか、推奨レベル99だぞ。そのミッシ
ヨン

結局代表してキングが言う事となる。

「ええ、でも皆見たくない？」

「命かけてまで見ようとは思わねえよ」

心底呆れたように言うキングに、その周りでうんうん頷いている他のメンバー。

ナインは、以前にイタズラをしてキレさせてしまったクイーンを思い出して、温泉に入っているのにも関わらず身震いしている。

「もっと皆素直になろうよ。僕は素直になれない皆を想って提案したのに」

「そうか、じゃあお前も素直になって本音を言ってみろ」

「セブンの裸が見たいです」

ジャックにしては珍しい、キリっとした声だった。

この男、ジャックは、かれこれ5年以上もセブンの事が好きで、ずっとアタックを続けている。しかし、そこは他人の事には気がついていても、自分の事には全く気がつかないセブン。周りが本当は気付いているんじゃないかと思うほどの鈍感ぶりを発揮し、スルーし続けていた。

そんなジャックの頑張りをずっと見続けていたキング達にとっては、ジャックのその気持ちも分からなくもない。一緒にいる時間が少ないマキナも、ジャックがずっとセブンを好きだった事ぐらいは分かる。

しかし、それと自分達が命を賭けるかは別だ。

「はあ……………とにかく、やるなら一人でやれ」

せめて邪魔はしないように、そう言い捨てると、さっさと露天風呂から上がるうとするキング。

しかしその肩を、ジャックが力強く掴む。

「もう、しょうがないなあ。こうなったら奥の手だ」

と言って出口とは反対の方へとキングを連れていくジャック。

そして、皆に背を向け、キングに何かを耳打ちする。

その時間わずか1分。

先程と全く変わらない様子で振り返ったキングは、全員に向け毅然と言い放つ。

「たまには、こんなバカな事をやるのも面白いだろう」

そんなキングの顔中央部、有り体に言えば右鼻からは、赤い筋が顎までつたっている。

それはなんの言い訳もしようのない、キング陥落の瞬間だった。

普段の冷静なキングのあまりの変貌に、エースは絶句して動けなくなる。

そんなエースの視界の隅で、今度はエイトがジャックに連行されていく。そしてまた1分、エイトも鼻血をぶちまけながら「俺も乗ろう」と真顔で言いだす。

ナイン、トレイ、マキナと次々と落されていく。

次は自分だ。と認識すると同時に、ジャックはいつもの笑顔でエースの方へと近づいてくる。

必死に逃げようと、まずは湯船から出ようとするが、

ガシッ

キング、エイトの両名に両腕を抑えられる

「おいおい、同じクラスメイト同士、一緒の事で盛り上がるうぜ」「お前もどうせ、『デューズのお ぱい見たい!!』とか思ってるんだろ？隠す必要なんかないさ」

「ん な っ つ !?ば、何言って、俺は別に………しまった!

「！」

エイトの言葉に思わず反応してしまったその隙に両足までもマキナとナインに掴まれる。

どうにかして振りほどこうとするにも、ガッチリ抑えつけられていて抜け出せる気がしない。

そうしている間にも、ジャックは迫り来る。

「おい、待て、待て、待ってくれ！」

ついに恐怖の笑顔が、ついにエースの目の前までやって来た。

女湯・露天風呂

デユースは俺の嫁だー！

「あれ？誰か呼びました？」

「ん？誰も読んでないぞ？」

「気のせいじゃない？」

* 男湯・露天風呂 *

「じゃ、皆女湯覗く事に、異論はないねえ？」

「ああ」

「ありません」

「ないな」

「いいから覗こうぜ、コラア！」

「やるからにはバレない様にな」

「思い立ったが吉日だな」

最後のエースが陥落して、全員の心が一つになった0組男子。全員、鼻血は止めて、準備完了である。

「しかし、いざ覗くと言ってもどうやって覗くんのだ？」

ようやくいつもの状態に戻ったキングが、冷静な意見を出す。

「この露天風呂は、男湯と女湯の間を竹で作った壁で仕切っており、その高さは3メートル程。竹なので上る事は難しく、簡単には覗けそうにない。」

「ふっふっふ、そこら辺は僕に任せなさい」

にも関わらず、ジャックは余裕を持ったままだ。

その態度に、キングらは懸念を示す。

「なんだ？何か策があるのなら言ってみてくれ」

そう作戦時と全く変わらない真剣な表情で尋ねるマキナの顔には何故か、「レムの尻」と書かれているように見える。

(マキナ、尻フェチだったのか……………)

胸派であるエースは、それを見て、静かにマキナとの決別を悲しむ。

いかに相手が自分と同じようにチヨコボを愛でる者だったとしても、胸の天敵である尻を好むのならば、敵として闘うのもやむを得ない。

エースがそんな覚悟を決めるのを待っていたかのように、ジャックは告げた。

「じつつはねえ、僕、『スケル』が使えるんだ」

最終兵器の使用を。

「ス……………スケルだと……………」

誰が呟いたのかも分からない言葉が、温泉の湯に溶けていく。ジャックの放った言葉は、全員を数十秒間黙らせる程の破壊力を持っていた。

「オ……………、イ」

どうにかしてナインが、口を開く。

「ん？何い？あ、スケルは簡単な魔法だから魔法苦手なナインでも10分で習得できると思うよお」

そんな的外れなことを言っているジャックに向かって、男子全員

は親指を上にあげた状態で右拳を出す。

所謂、『GJ』のポーズだ。

「「「「「ファインプレーだ、ジャック……………!!!」」」

この時のナインのスケルを覚える速度は、クラサメが見たら感動の涙を流していただろう。

後にキングはそう語っている

「全員、スケルは使えるようになったな」

エースの言葉に、皆力強く頷く。

魔法を扱うの苦手なナインでさえ、今覚えた魔法に関しては自信があるようだ。やはり、関心がある事に関しては人間いくらでも力を出せるのか。

そして、各々が、男湯と女湯を遮る壁に、手を当てる。

後は、魔力を集め、唱えるだけ。

「じゃあ、行くぞ……………スケル……………」

その言葉と同時に、壁が除々に消えていく。本来、『スケル』では服一枚程度を透けさせる程度のことしか出来ないが、7人も集まれば、その力は強大となる。

壁も完全に消え去り、その姿を現した桃源郷。そこで彼らが見た

ものとは、

「レムちゃん。早く入りなよ」

「あ、うん今行く！」

小さなタオルで申し訳程度にその体を隠しただけの、いや、申し訳程度に隠したからこそ、色々ヤバく見えるレムだった。

「ガハツツツ！！！！」

瞬間、正体不明の攻撃を受けたマキナが、盛大に吹き飛ばす。ストライカーの体当たりをモロにくらつてもそこまでは吹き飛ばないだろうと言うほどの距離を飛び、着地点では鼻からは鮮血をまき散らし綺麗な噴水を作り上げる。

「お、おい！マキナ大丈夫か！！」

慌ててエースが駆け寄る。するとマキナは、何故かエースとは反対の方を向いた。

「あれ？君が兄さんかい？ああ、俺だ。横にいるチヨコボ。名前分かんないけど、とつても可愛いな。へえ、チチリっていうのか」

致命傷を負ってしまったらしい。

「ま、待てマキナ！！今ケアルをかけるから！少し耐えろ！！エイトも手伝ってくれ！！」

「ま、待ってくれ。俺……そいつの名前を思い出せない……」

「何真顔でボケてるんだイト！……トレイ！お前も早く手伝え
！！」

「ちょ、ちょっと待って下さい。私も……………思い出せません……
……………」

「トレイまで何言って……………あれ？……………僕も分からない……………
……………クソっ！思い出せ、思い出せよ俺！！！」

そうしている間にも、マキナはドンドン『そこらへんの死体A』
へと行って行く。

とりあえず、三人でケアルを乱用する事でマキナの致命傷を重傷
にまでランクダウンさせる。

どうにかマキナの名前を思い出す事の出来たトレイは、そこで疑
問を覚える。

先程から、ジャックとナインとキングの聲がしていなくないか？

慌てて、女湯の方、つまり三人のいる方へ目を向ける。

「ちょ、サイスのおっ　いすごいでかいんだけど！！！」

「うぎょー！？ちょっとセブンちゃん。このけしからん胸はなんで

すか？」

「お、おいバカ勝手に触るんじゃないやねえ！ふあ！？……ちよ、揉むなひやは！？」

「ひゃ！？ちよ、待つんだシンク、いい加減に、ひゃい！して

」

「クイーンさん、大丈夫ですか？」

「ええ、少しのぼせてしまっただけなので休んでいれば大丈夫です。なので……二人を助けてあげて下さい」

「え、と……あそこには混ざりたくないなあ……」

非常に艶やかな声が聞こえた。

具体的に言つとあと少しで15禁扱いにされてしまいそんな具合の音が。

一旦女湯から目を離して、比較的近くにいる三人を見てみると、ジャックとキングはシンクとケイトの攻撃の対象となっているセブんとサイスに、ナインはのぼせたクイーンの赤い顔にやられてしまつたらしい。

キングは、先程止めたにも関わらずまた鼻から赤い液体を垂らして固まっている。まばたきすらしていない。それほどまでにサイスを凝視している。

ジャックは「セブンおっ　いセブン　っばいセブンおっば」と呟き続けながらこれまた鼻血を垂らしている。目がド変態の目だ。

ナインは余りの衝撃を受け止めきれなかったのか、目を回している。目を回している割には、その少し下の辺りにかけてあるタオルが変にテントを張っているが、それは気にしない。本格的に15禁になっってしまうので。

そんな三人を見つめているトレイも、目の前に広がるその光景に全くダメージを受けていない訳ではない。むしろ、ノックアウト寸前まで追い詰められている。

しかし、トレイお目当てのシンクはセブンに後ろから抱きつき、セブンのその素晴ら……けしからん胸を責め立てるばかりでトレイからでは肝心なところがよく見えない。そのおかげで、トレイはここまで生き残る事が出来ていた。

バシヤ

その時、何かが湯船に落ちる音が鳥の耳に届く。女湯の方からだ。

「ん？」

気になってそちらを見るトレイ。

「ハア、ハア、ハア………」

「いやあ 役得役得」

そこには、ようやくシンクから解放されたのか湯船の縁に捕まって息を荒くするセブン。

そのわきには、手を腰に当てて所謂「えっへん」のポーズを取るシंक。

そのポーズだと、身体の隅々までトレイの視界に入る。

「クツ!!」

予期しない攻撃に、一気に視界が揺らぐトレイ。

しかし、ただで死ぬわけにはいかない。

この覗き、もはや男子メンバーが生き残れるかどうかには問題はない。

視界の一部が赤く染まり、地面が歪むを感じ、意識の薄れを感じながらも、トレイは伝える。

エースとエイトに、最後の警告を。

「エース、エイトツ！女湯を見てはいけません！！我々で生き残っているのははやあなたた

トレイの決死の忠告は、最後まで伝えられなかった。

しかし、その一部だけでもエースとエイトに危機を伝えるには十分すぎる。

それまでずっとマキナの看病をしていた二人だが、トレイの言葉にとっさに振り向き、男湯の惨状を把握、慌てて女湯から背を向ける。

なぜか直立不動の「気をつけ」のポーズで女湯を背にしながら、二人は作戦会議をする。

「……どうする、エース」

「どうするも何も、ここまで被害が出たらもう続行は不能だ。早く怪我人を回収して部屋に戻ろう」

「そうだな」

素早く結論付け、動き出そうとする二人だったが、ふと女湯から聞こえる声にまたしても動きが止まる。

その声は、最初はサイスだった。

「ハアハア……こんのツ」

「へ？　！？ふひっ！？ちよっ、そこはやめっ」

「んお？もしかしてケイト、脇腹弱い？」

「バツ、そんなわ　きゃひツ！？ふひゃ、ひゃははははー！」

「ほう、これはいい事を聞いたな、さっきまでの恨み、ここで晴らすぜえ？」

「まっ、ごめ……アハツ、ふははははー！！も、ダメ、くふっ！？」

どうやら、先程までケイトにイタズラされていたサイスが、反撃をしているらしい。

反撃自体は普通のくすぐりだが、ケイトの弱点を見事についているのでやたらエロく聞こえる。

「……………なあ、エース」

「……………待て、落ち着け」

「振り向いた先に、何があるのかな」

「お願いだから考え直してくれ」

「……………」

「……………」

「ごめんっ!」

「くそっ! やめるエイト。早まるな!」

長い葛藤の末、エイトは己の欲望に負けて、振り向いてしまう。
一瞬後、エイトが赤い花を咲かせて幸せそうに逝く。

残ったのは、エースひとりになってしまった。

そこで更に、エースへ追撃が迫る。

そのタイミングは、もはや狙っているとは思えなかった。

「痛ッ…………… 죄않은렘さん、ちょっと強いです」

「あ、ごめんね! もうちょっと優しく…………… このくらい?」

「ふぁ…………… はい、その位です……………」

「…………… ちめてくわね!」

女湯から聞こえるデュースとレムの会話、何をやっているか知らないが、とてつもなくエロい事やってる気がする。

しかし、とエースは自問する。

ここで安易に振り向いてしまっていないのか？

今、そんなエロいデュースを見れば、確実に周りの死体と同じ末路たどるだろう。その自信が、情けないがエースにはある。

そんなことになれば、あまりに風呂を出るのが遅いと、女性陣に怪しまれ、最悪何をやっていたかバレてしまう可能性がある。

そうなれば、0組男性陣は、7人のルシと同時に闘う事になってしまうだろう。

それだけは、そうなれば、アレシアといえども蘇生する事の出来ないレベルの死体になってしまいかもしれない。

「…………でもデュースちゃんも、意外と胸あるね」

「…………確かにそうですね。着痩せするタイプなのでしょうか。……羨ましいです」

「そ、そんなことはありませんよ。セブンさんやサイスさんには敵いません」

「いや、くびれとか考えると、アンタの方がスタイルいいよ」

「そだね〜。まさにボンツ、キュツ、ボンツて感じだよね〜」

「ああ、自信もっていいと思うぞ……………どれ」

「ちよ、何言ってるんですか皆さん……………ひゃっ!?!?な、何する

「んですかセブンさん!!」

「はは、すまんすまん。つい、な」

もつとつでもいいや。

皆見たいものを見て逝つたんだ。俺だつて見る権利はあるだろう。

目の前の欲に完全に敗北したエースは、意気揚々と振り向き見る。

女湯と男湯を区切る緑色の壁を。

「……………は？」

一瞬で頭が真っ白になるエース。
なぜ、見えない？竹の壁が透けていない？

「……………はっ! 『スケル』か!」

スケルの効果時間切れ。

エースに突き付けられたのは、そんなつらい現実だった。

まだ聞こえる女湯の姦しい声が、さっきまでと違いとても遠く聞こえる。

「……………いやまだだ！もう一度スケルを……………！！」

桃源郷への夢をあきらめきれないエースは、もう一度スケルをかける。

しかし、竹の壁は、軽く薄くなるだけ。

当然だ。さつきは、7人同時にスケルをかけて、ようやくこの壁を透かせる事が出来たのだ。一人では、これが限界だろう。

女湯の方も、そろそろ風呂から上がるか、という流れになっている。

湯船から出ていたせいか、肌に当たる風がやけに冷たく感じるエース。いや、冷たく感じる原因はそれだけではないかもしれない。

「……………いや、これで良かったんだ。良かったんだ……………」

そう呟きながら脇に倒れているエイトを運ぶ脱衣場へエースの目は酷く潤んでいた。

(後書き)

意見、感想などを頂けると、非常にうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2004z/>

0組の温泉旅行

2011年12月7日06時48分発行